昭和三十四年用（昭和三十三年十一月現在）

窯業同窓会会員名簿

付 会誌 第五号

東京都目黒区大岡山一番地
東京工業大学内
窯業同窓会
（振替口座東京一九六八五五番）
電話 荏原（七八）〔〇一四一—六〕〔六〇六一—六〕

会誌目次

会長挨拶 大野 政吉
御挨拶 山内 俊吉
窯業同窓会総会と懇親会
窯業同窓会規約
窯業同窓会役員
同事業寄附芳名
東海支部の発足
◇母校東京工大学長に山内俊吉教授新任◇窯業コース卒業 論文発表会◇窯業協会第一二回表彰受賞者◇工学博士授与◇工業材料研究所発足◇学位論文公聴会◇退職の三氏 故熊沢先生墓石建立◇会員訃報

挨拶

会長 大野 政吉

同窓並に窯業関係の皆様にはいつも御健在で、窯業界発展の為に御活躍大慶に存じ上げます。窯業同窓会も各位の熱心な御協力により相互の連絡と互助等によって益々隆盛となり、窯業界発展に大きな推進力となっていることは誠に御同慶に堪えません。小生先般の総会で再び会長に推され恐縮しておりますが、老齢乍ら頑健でありますので各位の御支援を得て、会の向上に努めたいと存じますから宣敷御願いします。

さて、昭和三十三年は吾々会員にとつて永く印象に残る様なことがありました。即ち㈠山内教授が母校工大学長に就任されたこと、㈡大先輩の熊沢治郎吉、笹井熊之助、堅田欽次の三氏が永眠されたこと、㈢東海支部が結成されたことなどであります。

山内教授の工大学長就任経過は別記の様に学内の与望を負うて就任されたものであるが、母校の同窓から推されたのは山内教授が最初で而も窯業の同窓であることは特に窯業関係者の喜に堪えない所で、一同に代り心からなる御祝詞を申し上げます。どうぞ御自愛の上良き工大学長であると同時に吾が邦科学教育と工業の振興に御活躍を祈って止みません。

故熊沢治郎吉氏は明治三十年卒業の大先輩であるが、本年六月二日に八十六才の長寿を全うされ永眠された。氏は岐阜県陶器学校長、東京工業試験所第三部長其他及び大正六年から昭和六年に亘り母校窯業科の講師をされるなど四十有五年の間窯業教育機関、試験研究機関及び窯業協会其の他を通じ吾が窯業界の発展に大きな御功績を顕わされたのであります。

故笹井熊之助氏は明治三十七年に卒業されて品川白煉瓦株式会社に入社大阪工場、湯本工場を歴任し耐火煉瓦製造技術今日の降盛の基盤を築いた先輩の一人であります。昭和二年に同社を退き合資会社三和商会を創立して事業を進めたが、昭和十年美濃窯業株式会社取締役技師長に就任、ここでも永年の技術を発揮し大きな功績を残され、昭和二十年後進に途を開く為辞任された。一月二十七日に永眠さる。享年七十七才でありました。

故堅田欽次氏は明治四十年に卒業され品川白煉瓦株式会社に入社湯本工場、平工場に勤務したが、大正十四年に退社し、昭和三年一月に福島県平町に磐城シャモット煉瓦製造所を創立し、昭和十二年に株式会社とし自ら社長となり経営に当られた。昨年は目出たく創業三十年を迎えたが、資力の乏しい個人経営の小企業で苦難の道を切抜けて今日に至ったのには敬服している。これは氏が学生時代ボートの選手できたえた強健な心身が昨年に至るまで頑健な身体をもち続け、加えて明朗闊達な気概が変らなかった為である。この様にして氏は耐火物界に大きな功績を残し去る四月四日に七十六才の長寿を全うされ永眠された。

以上熊沢、笹井、堅田の三先輩及び本年物故された井上、谷沢、西尾の各氏生前の御功績を感謝し御冥福を御祈り申し上げます。

最後に別記の様に本会に始めての東海支部が創設されました。同方面の同窓各位の御協力を感謝し今後の御発展をお祈りします。

御挨拶

山内俊吉

今般はからずも学長に選挙され八月一日正式に就任いたしました。

もとよりその任ではありませんが、最善をつくして母校の発展のために努力するつもりでありますから、何卒今迄以上に御支援御鞭韃の程御願い申し上げます。

実は六月九日に工業材料研究所長に選出され、六月十三日に正式発令同所々長に専任されましたが、学長就任と同時に工業材料研究所長事務取扱となり、併せて附属工業高等学校々長事務取扱をも兼ねることになりました。なお当分学部教授も併任することになりました。何卒よろしく御願いいたします。

工業材料研究所は既に御承知のことと思いますが、窯業研究所と建築材料研究所とを併合し発展的解消して出来た研究所であります。

窯業研究所は、申し上げるまでもなく窯業界の御援助のもとに昭和十八年平野耕輔先生を中心として出発した研究所であります。当時諸会社から総額五十万円の大金をいただき三十万円で四百坪の建物を建て、残りの二十万円で設備にあてることになっていましたが、戦時中で建物の許可が得られずつづいて終戦となり貨幣価値の下落の為如何とも出来ず建物がないままに現在に及んでいます。そこで窯業研究所建設後援会の資金は先般後援会理事会に図り、設備に一部使った残り四十万余円を工業材料研究所後援会をつくりこれに移しました。

この様にして窯業研究所としての活動は終止符を打ち、工業材料研究所として出発することになりました。工業材料研究所は今後旧建築材料研究所の建物を中心として集まることに計画中であり、現在材料物性第一、同第二、無機材料第一、同第二、焼結材料、特殊金属材料、材料応用の七部門からなっているが、将来無機材料第三、その他の部門増が考えられ、更に有機部門をも含んだ大研究所になることでせう。

窯業研究所がなくなったことは誠に淋しい気がいたしますが、今後工業材料研究所の発展と共にその礎石であった窯業研究所の名は永久に残ることでありませう。

今日迄、皆さんが窯業研究所に寄せられた並々ならぬ御支援に対し茲に心から感謝申しあげると共に今後窯業研究所時代と全く同様に工業材料研究所を可愛がっていただきたいことを切に御願い申上げる次第でございます。

簡単でありますが学長就任の御挨拶を兼ねて窯業研究所のその後の御報告並に工業材料研究所に関し御願い申し上げます。

窯業同窓会総会と懇親会

昭和三十三年四月二十四日　於　蔵前工業会館

総　会　　司会　田賀井秀夫

一、会長挨拶　　大野政吉会長

一、会務報告　　別記会計報告と併せて承認

一、規約改正の件　　別記の様に改正を承認

一、役員改選の件　　先づ会長選挙の為、仮議長森谷太郎氏が選出され選挙の方法を図った結果満場留任に賛成したので議長を大野氏と代る。大野会長は留任挨拶後副会長及幹事の選出方法を図った結果会長一任となった(後日常任幹事会に於て副会長は留任、幹事は別記の通り選出した)

以上で総会議事を終る。

一、卒業五十年(明治四十一年)の大野一造、亀啓三郎、小林作平の三氏へ記念品(辻晋六作花生)贈呈

一、卒業五十年の三氏謝辞

一、山内副会長より母校の近況報告があって閉会した。

懇親会

カクテルパーティ式宴会により老若同窓が歓談、盛会裡に会を閉じた。(出席八十七名)

尚日木硝子株式会社及大野政吉、倉田元治両氏よりビールの御寄贈があり、佐々木硝子株式会社からは名入コップを多数寄贈され、又多数の方々から事業資金の御寄附を頂いた。厚く御礼申し上げます。

昭和三十二年度窯業同窓会収支決算書

収入の部

金　一四六、三八一円　収入総額

内訳

六、八七二円　前年度繰越金

二五、五〇〇円　事業寄附金(六七名分)

六二、〇〇〇円　特別事業寄附金(名古屋にて)

五二、〇〇〇円　会誌第四号広告掲載料

九円　預金利子

支出の部

金　一四三、四七〇円　支出総額

内　訳

六二、〇〇〇円　名古屋での総会、懇親会補助

七四、一二〇円　会誌第四号印刷諸費

七、二二〇円　右発送費

二二〇円　雑支出

差引残高

金　二、九一一円　次年度へ繰越金

右の通り報告します

昭和三十三年四月二十四日

会計幹事　近藤、杉浦

窯業同窓会規約

昭和三十三年四月二十四日改正

一、本会は窯業同窓会と称す

二、本会は会員相互の親睦を図り窯業界の向上発展を期するを以って目的とする

三、本会は事務所を東京都目黒区大岡山東京工業大学内に置く

四、本会は第二条の目的を達成する為に左の事業を行う

㈠窯業懇談会　㈡見学会　㈢名簿発行　㈣その他幹事会で必要と認めた事業

五、本会々員は東京工業大学窯業関係者を以て組織する

六、本会の経費は会員その他よりの事業寄附金、その他の収入を以て支弁する。会計年度は毎年四月に始り翌年三月に終る。

七、本会は毎年度始めに総会を開き左の事を行う。但し、幹事会の議決により文書によることが出来る。

㈠会務の報告　㈡役員の改選　㈢規約の改正　㈣其他

八、本会に左の役員をおき任期は二カ年とする。但し、再選は差支えない

㈠会長　一名　㈡副会長　五名

㈢幹事　若干名　㈣常任幹事　五名

九、会長、副会長及び幹事は総会で選出する。常任幹事は幹事の互選とする。

一〇、会長は本会を総理し、副会長は会長、事故ある時、代行する。常任幹事は会務(庶務、金計)を処理する。幹事は本会の重要事項を審議し、常時地方各職場並びにクラス等の状況、移動及び本会に対する意見等を通報するものとする。

一一、本会に支部を置くことが出来る。支部は本部と連絡を密にし本会の発展に協力する。

窯業同窓会役員　昭和三十三年四月改選

会長　大野　政吉

副会長　江副孫右衛門　浮洲　武彦　久保　季吉　山内　俊吉　倉田　元治

井上　英吉（大二）　大塚　喜藏（大三）
大村　関齊（大四）　各務　鉱三（大五）
榎本　修二（大六）　鈴木　保雄（大七）
村上　三五朗（大八）　伊藤　亮（大九）
中野　義雄（大一〇）　石塚　正信（大一一）
野村　三治大（大一一）　若林　滋（大一二）
稲生　謙次（大一三）　江副　勇馬（大一四）
松尾　義人（大一五）　伊奈　辰次郎（昭二）
小島　豊之進（昭二）　名和　二郎（昭三）
川畑　健雄（昭四）　野口　長次（昭五）
辻　晋六（昭六）　森谷　太郎（昭七）
鈴木　信一（昭八）　村松　庄治（昭九）
水野　茂樹（昭一〇）　檜山　真平（昭一〇）
稲村　泰（昭一一）　伊藤　正三（昭一二）
田賀井秀夫（昭一三）　大河原　晋（昭一四）
素木　洋一（昭一五）　弘瀬庸之助（昭一六）
加藤　政良（昭一六）　境野　照雄（昭一七）
毛利　純一（昭一七）　田端　精一（昭一八）
近藤　連一（昭一九）　松本　三則（昭二〇）
鈴木　弘茂（昭二一）　伊藤　善髙（昭二一）
長谷川　泰（昭二二）　浜野　健也（昭二三）
赤尾　洋二（昭二三専）　大内三男（昭二三専）
杉浦　孝三（昭二四）　島田　信郎（昭二五）
山内　尚隆（昭二六）　浅野　正和（昭二七）
安竹　了知（昭二八）　野木平八郎（昭二八新）
古丸　勇（昭二九）　小川　秀治（昭三〇）
中村　敦（昭三一）　西　晴哉（昭三二）
新井　博之（昭三三）　浅野修二（昭三〇技）
沢田　正吾（昭一七技）　鈴木哲夫（昭一八技）
秦　孝明（昭一九技）　今間朋春（昭二〇技）
草場　知喜（昭二一技）

学内教官

河嶋　千尋　清浦　雷作　山田　久夫
川久保正一郎　岩井　津一　吉田　博
宮川　愛太郎　村田　順弘　斎藤　進六
佐多　敏之

常任幹事

庶務　素木　洋一　境野　照雄
毛利　純一

会計　佐多 敏之　赤尾 洋二
名簿担当　宮川 愛太郎

窯業同窓会事業寄附芳名

（昭和三十三年度）（敬称略）

三、〇〇〇円　大野 正吉　久保 季吉
倉田 元治
二、〇〇〇円　理学電機(株)　光陽研磨材(株)
東京高級炉材(株)　山内 俊吉
中村 能一　倉田 貢
一、五〇〇円　湊 よき　名取 賢荘
一、〇〇〇円　小林 作平　鈴木 保雄
若林 滋　村上三五朗
髙橋 久男　江副孫右衛門
太田 千里　長崎 勧
宮内準五郎　大野 一造
亀 啓三郎　真保 義郎
北川 信吉　木船要太郎
河嶋 千尋　森谷 太郎
松崎 錠三
五〇〇円　野口 長次　佐々木茂弍
足立 保彦　草間 保
水地 満穂　田端 精一
各務 鉱三　斉藤 元良
長谷川保和　鯉江 七郎
渡辺 文平　逸見 英一
角田 穎保　川畑 健雄
松本 昌蔵　山下 透
水野 茂樹　田上 嘉秋
古丸 勇　左右田孝男
田中 博一　加藤 勝治
市塚 年　西田 一雄
岩切 一良　江藤 哲夫
尾野 勇雄　清浦 雷作
山田 久夫　川久保正一郎
田賀井秀夫　素木 洋一
稲生 謙次　吉田 博
岩井 津一　宮川愛太郎
遠藤 敏夫
川村新太郎
三〇〇円　森本 孝治　村田 順弘
田村 忠臣　関口 淳
加藤 春美　日笠 泰行
境野 照雄　大河原 晋
佐多 敏之　毛利 純一
近藤 連一　斉藤 進六
鈴木 弘茂　長谷川 泰
浜野 健也　赤尾 洋二
酒井 亨　藤沢 旭
二〇〇円　吉村 満雄　斉藤 鶴義
御代健次郎　伊藤 豊成
鳥 珪次　塩田 正利
一〇〇円　尾鳥 正男　黒田 泰弘
大場 立夫　上西 義介
下平高次郎　吉永 善子
青島 清二　大矢 真吾
瀬髙 信雄　田中 弘子

尚昭和三十二年度事業寄附で会誌第四号に発表後の芳名は左記の通りです（敬称略）
一、〇〇〇円　福井哲　五〇〇円　高山泰造
二〇〇円　鈴木敏弘

東海支部の発足

本会々誌第四号に野口氏が報告された様に名古屋を中心に瀬戸、多治見、刈谷、常滑、四日市、静岡方面の同窓約一五〇名で東海支部の設置が準備され実質的には組織され、昨年四月に名古屋で盛大に催された本会の総会及懇親会が強固な地かためとなった。そこで四月の総会に於て規約の一部を改正し別記の様に第十一条に支部設置の件を追加した。初代支部長には石塚正信氏（石塚硝子(株)社長）が推され活動を開始した。現在の支部事務所と役員は左の通りである。

窯業同窓会東海支部事務所
名古屋市瑞秘区堀田通
日本特殊陶業株式会社内
支部長　松尾 義人
副支部長　伊奈辰次郎、小島豊之進
常任幹事　野村三治、名和二郎、加藤正之

幹事　野口長次、檜山真平、水野茂樹
馬渡豪、大石信男、船井長治
加藤政良、新居善三郎、柴田茂、
山本登、加藤　鈔　堀江　勲

母校東京工大学長に山内俊吉教授新任

内田学長の任期満了に伴う次期学長の選は六月十八日の第一次選挙で七氏が選出され次で七月二日に第二次投票を単記無記名方式で過半数が得られる迄を段を追って行われた結果別表の様に山内教授が九十三票の過半数を得て当選し内田学長の後任として八月一日から新学長に就任された。本学創立当時は校長正木氏に次で手島、坂田、吉武、中村、八木、和田、内田の各氏を過て九代目であるが本学出身者が選ばれたのは山内教授が最初で而も窯業の同窓であることは御同慶に堪えない次第であります。御自愛の上よき学長として御活躍を衷心御祈り出し上げます。

尚御承知の様に山内新学長は大正十三年に東京高工窯業科を卒業され次で九州帝大採鉱科を卒業後本学にもどり講師、助教授、教授を経て現在に至っておりますがこの間窯業研究所長を永く勤められ先般工業材料研究所が設立され所長に推され現在も兼任しておられる。

候補者

氏名	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回
山内	六二	七二	八五	八七	**九三**
佐々木	六〇	七二	七八	八一	八五
遠山	二九	二〇	一五	一〇	―
森田	九	六	―	―	―
二見	九	一二	―	―	―
海老原	八	―	―	―	―
津村	五	―	―	―	―

窯業コース卒業論文発表会

日時　昭和三三年三月一一日(火)九時～一三時半
場所　東工大本館第九番講議室

1. 珪灰石磁器の透光性について　新井　博之
2. 珪灰石の性質について　石原　毅
3. 黒鉛のガラスによる濡れについて　尾野　幹也
4. 示差熱分析の自動化に関する研究　副島　繁雄
5. 粉体の混合物の諸性質について　その1　溶出現象について　田丸　貞美
6. 燐酸ガラスの失透に関する研究　波多野　高文
7. (a) X線によるC_2Sの変態に及ぼすFe_2O_3、C_2Fの影響に関する研究　宮人　英彦
   (b) X線によるC_2FとCaOとの固溶に関する研究
8. ウランカーバイド系核燃料の合成について　山岸　茂
9. (a)球状粉体の粒度配合による内部硬度分布
   (b)X線によるクリストバライトの定量について　山田　寛治
10. TiC-C_0系サーメットの製造要因に対するラバープレスの影響　渡辺　信彦

卒業式は3月26日に新講堂で挙行され学部三二八名、修士課程五一名、博士課程一五名、が夫々学業成つて目出度学園を巣立つて行つた。

窯業協会第十二回表彰受賞者

論文賞　東京工大、工業材料研究所　教授　清浦雷作氏
技術賞　東海炉材(株)取締役知立工場長　浮洲武彦氏
同　名古屋工業技術試験所第五部第一課長　伊藤幸人氏

工学博士授与

大阪工業試験所　田中広吉氏(昭和十七年卒)は先に学位論文(セラミックコーチングに関する研究)を工大へ提出公聴会を経て審査の結果去る七月に工学博士の学位を授与された。

工業材料研究所発足

本学附置研究所の窯業研究所と建築材料研究所が合併され四月一日から新たに工業材料研究所が設置され山内教授が初代の所長に推され現在も学長と兼任されている。

学位論文公聴会

本学工業材料研究所助教授　田賀井秀夫氏の学位論文「ドロマイトクリンカーの消化防止に関する研究」に関する公聴会が十月六日本学第一会議室で開催された。

退職の三氏

湊よきさん　昭和二年作業員として勤め窯業のおばさんで親しまれていた湊さんは六月末に退職されたがこれより先本学七十七回創立記念式典席上で永年勤続表彰状と記念品が内田学長から授与された。

杉浦孝三氏(地学教室助手)
六月末に退職され三井金属鉱業(株)東京研究所へ栄転された。

柴本房子さん(山内教授室)も六月末退職された。御結婚の準備かと拝察される。

故熊沢先生墓石建立

熊沢治郎吉氏(明治三十年卒)は我国窯業界に大なる御功績を残され去る六月二日八十六才の長寿を全うされ遂に御永眠されたので先生と師弟関係にある同窓が中心となり墓石建立資金が募集された。取扱は東海支部(日本特殊陶業株式会社内、支部長松尾義人氏)で御世話下さった。

会員訃報

左記の方々は永年窯業界の為に御尽力されましたが先般御永眠されました。同窓一同哀悼の意を表します。物故された方方生前の御功績を感謝し御冥福を御祈り申し上げます。

熊沢治郎吉氏(明治三十年卒)六月二日　御永眠
笹井熊之助氏(明治三七年卒)一月二七日御永眠
堅田　欽次氏(明治四十年卒)四月四日　御永眠
井上　進吾氏(大正八年卒)七月二日　御永眠
谷沢　喜信氏(昭和三年卒)十月二十三日御永眠
西尾　義雅氏(昭和九年卒)四月八日　御永眠

無機材料(窯業)四年生就職予定先

氏名	会社名	勤務地
秋田育男	国際工機KK	東京都
氏原慶二	セントラル板硝子KK	堺市
内山　浩	三井金属鉱業KK	
遠藤正昭	日本板硝子KK	
大菌周三	東洋陶器KK	茅ケ崎
清末義和	東洋陶器KK	小倉
桑原　誠	東工大大学院	
清水　広	八幡化学工業KK	八幡
田辺徳也	黒崎窯業KK	八幡
田平伸生	日本特殊陶業KK	名古屋
武　孝夫	小野田セメントKK	
辻　敏夫	日本セメントKK	
中川真澄	三菱セメントKK	八幡
丹羽愛礼	日綿実業KK	
福永敏宏	徳山曹達KK	徳山
吉田正明	東京芝浦電気KK	
中村純一	富士通信機製造KK	川崎
青木英一	大阪窯業耐火煉瓦KK	

編集後記

○会員並に窯業関係の皆様にはいつも御健やかで窯業界発展の為に御活躍のことと拝察し大慶に存じ上げます。

隔年発行の本会名薄も皆様の御支援と広告御掲載により資金面で御援助下さった各社の御厚意で御手許に送ることが出来ました。有難う御座います。これからの二年間をフルに御活用して頂ければ幸です。まだ不備の点もあると思いますが皆様も勤務先や住所に御移動がありました節は御手数乍ら御知らせ願います。

○この名薄は従来と少し編集を変えました。即ち昭和十六年から二十一年迄の卒業生を出した工業技術員養成所と昭和二十三年卒業の専門部の名簿は従来見安い為なども有って別に纏めておりましたが現在之等卒業生諸兄は夫々重要な地位で活躍されて居るのに差別待遇の様に見られ面白くないなどの御意見も出たので常任幹事会にも図り今回の様に各年度学部と併記しましたので御諒承願いたいと存じます。

○会誌五号としての記事を簡単に圧縮して名簿の末尾に附記しました。これもいやな言葉ですが経費や其他の事情で止むなくやったことで御用捨願いたいと存じます。

○本学山内俊吉教授が別記の様に卒業生として初の学長に推されました。御同慶に堪えません。どうぞ御自愛の上御活躍を御祈り申し上げます。

○本会に最初の東海支部が生れました。窯業生産の中心地であるこの地域の皆様どうぞ窯業界の発展を支部の力で一層促進させて頂きたいと存じます。皆様の御健在を御祈り申し上げます。

○昭和十八年以来十五年間活躍し窯業界に貢献し続けて来た窯業研究所が建築材料研究所と共に発展的に解消して工業材料研究所が創設された。窯研の名が消えたことは淋しい気もするが一層広い無機材料分野の開発研究に期待し先生方の御健在と御研鑽を御祈り申し上げます。

尚末筆乍ら会誌第四号の日本陶器株式会社広告でマークが反対になっておりました。編集校正の不行届を御詫び申し上げます。

(宮川愛太郎)

昭和三十三年十二月五日　印刷
昭和三十三年十二月十日　発行
編集兼発行人　宮川愛太郎
発行所　窯業同窓会
東京都目黒区大岡山一番地
東京工業大学内
振替口座東京一九六八五五番
印刷所株式会社　技報堂
印刷者　大沼正吉